

聚楽第外堀の存在とその評価

古川 匠

要 旨

豊臣秀吉が築城した聚楽第は、織豊系城郭の一例として名高いが、発掘調査や地表面探査から得られる考古学的な所見と、文献、絵画といった史資料における描写とのあいだでは、外堀の有無について明確な矛盾がある。筆者はこれまで、聚楽第が存在した末期の段階に外堀が掘削され掘削途中に聚楽第が廃城となったと解釈していたが、むしろ、最初期の段階に掘削されたものの、計画が変更され、掘削途中に工事が中断して埋められたと見解を改めた。

キーワード：聚楽第、表面波探査法、駒井日記、聚楽第図屏風、諸国古城之図、洛中洛外図屏風（京都図屏風）

はじめに

安土桃山時代を代表する城郭のひとつである聚楽第は、天正 13 年（1585）7 月に関白に就任し、翌 14 年（1586）9 月に豊臣姓を賜り同年 12 月に太政大臣に就任した豊臣秀吉が、京都での本拠地として同 14 年（1586）2 月に着工し同 15 年（1587）9 月に現在の京都市上京区に完成させた城郭で、秀吉の公邸と豊臣政権の中枢として象徴的な意味合いを持っていた。聚楽第については多くの文献記録や絵画資料が残るが、豊臣秀吉の次の城主である豊臣秀次の失脚によって文禄 4 年（1595）に廃城となり短期間で姿を消したため、実態の多くは不明である。

聚楽第は、城郭としての側面を持ち合わせてはいたものの、平安京（平安城）が天皇を護る城であるという古来の位置付けを重視したためか、聚楽第はあくまで「邸宅」として位置付けられていた。日記等の同時代記録を参考すると、聚楽第の呼称としてもっとも多く登場するのが「聚楽」である。それ以外には、「聚楽城」（『上京文書』）という表現もあるが、同時代の公家の日記には、「聚楽亭」（『言経卿記』）、「聚楽屋敷」（『兼見卿記』）、「聚楽新宅」（『親綱卿記』）と表現され、城郭という位置付けはされていない¹⁾。

聚楽第の実態解明には考古学的な遺構の知見が不可欠で、発掘調査や地中探査による遺構の検出と絵画資料の表現との総合的な復元研究によって、聚楽第の解明はこの数年間で進んできた。しかしその一方で、遺構と文献史料・絵画資料との間には大きな乖離があることも事実である。この「乖離」とは、端的には外堀の有無である。遺構の状況からは、外堀が存在したこ

とは確実なようだが、信頼度の高い文献・絵画資料には外堀の存在が一切描写されていない。

本論では、この考古学的なデータと文献、絵画といった史資料データとの間に存在する不整合、乖離をどのように解釈するべきなのか、改めて検討してみる。

1. 発掘調査と地表面探査による聚楽第跡の復元

聚楽第の発掘調査は本丸、南二之丸、西之丸、北之丸といった「内郭」を中心にデータが蓄積されてきた。「内郭」における顕著な発掘調査成果としてまず挙げられるのが、1991 年に実施された本丸東堀跡の発掘調査で、堀の埋土から大量の金箔瓦が出土した（森島 1993）。1997 年の北ノ丸北堀の発掘調査では、石垣基底部の石列が検出された（馬瀬 1998）。そして、2012 年の本丸南堀の発掘調査では、本丸正面の重要な地点に築かれた石垣が検出された（古川ほか 2013）。この他にも、京都市文化市民局、京都市埋蔵文化財研究所による地道な発掘調査によって各曲輪の堀の肩が検出され、大まかな曲輪の位置と規模は確定しつつある。

「外郭」においては、発掘データは主に西外堀で蓄積されてきた。堀状遺構の西側肩部が 1999 年に確認され、さらに、2023 年には、幅約 12m、深さ約 3.0m の南北方向に続く素掘りの堀状遺構が検出された（京都市文化財保護課 2023）。この調査によって西外堀想定地点ではじめて堀の可能性がある遺構の両肩が検出されたことは、注目に値する成果である。

聚楽第の解明に発掘調査は不可欠だが、稠密な市街地である現在の聚楽第跡で大規模な発掘調査を実施する機会は限られるため、地表面探査による遺構の検出

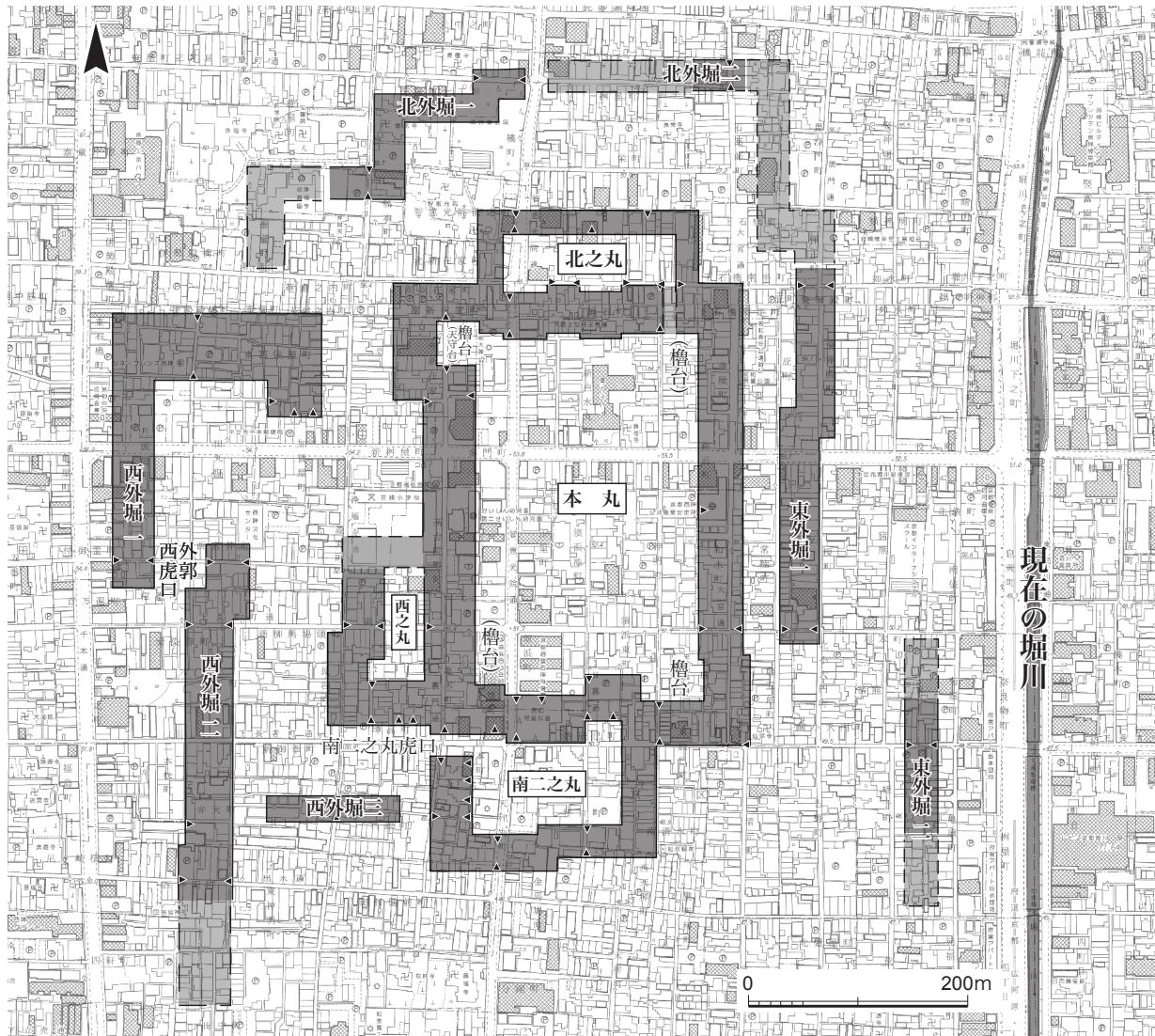


図1 主に考古学的データ（発掘調査・地表面探査）をもとにした聚楽第の復元図（古川ほか 2018 を一部改変）

も必要となってくる。筆者が代表を務めた、京都大学防災研究所の共同研究では、アスファルト舗装された細い道路が碁盤の目状に走る現在の聚楽第跡の環境を活かした探査法である「表面波探査法」を用いて聚楽第跡の全面的かつ詳細な地表面探査を実施し、地下に伏在する大規模な堀の位置を探り当てることに成功した（古川・釜井・中塚 2014）。「表面波探査法」によって検出された堀の位置は既往の発掘調査地点の隣接地点で実施しても全く齟齬のないものであったことから、信頼できる手法と考えられる。

発掘調査と地表面探査の成果から、聚楽第の内郭に相当する本丸、南二之丸、西之丸の形状を復元したのが図1である（古川・釜井・坂本・中塚 2018）。

外郭部で実施した表面波探査では、これまで存在が確認されている西外堀だけでなく、北、東を囲む外堀らしい遺構の存在が確認されたが、南には外堀の存在

を確認することができなかった。もちろん、このような外堀の配置は、防御施設としては不完全であり用途に適さない。とはいえ、西外堀は2本の堀の位置が南北に食い違うように位置しており（図1 西外堀一、二）、一定の防御構想の存在も示している。

地中に埋没する聚楽第跡に限らず、城郭の形状は、最初の築城から改築、修理といった過程を経た遺構の総和として存在する。例えば、豊臣秀吉の居城として名高い大坂城は、天正11年（1583）に築城が開始されるが、最初に本丸が築かれ、同14年（1586）に二の丸、文禄3年（1594）に惣構堀が着工され、さらに、秀吉の死の直前の慶長3年（1598）に大規模な増強工事が着手された。

聚楽第は大坂城に比べると実態が不明な点が多いが、秀吉が城主の際に本丸、さらに南二之丸、西之丸が築造され、さらに、秀次が城主となった際に北之丸が増

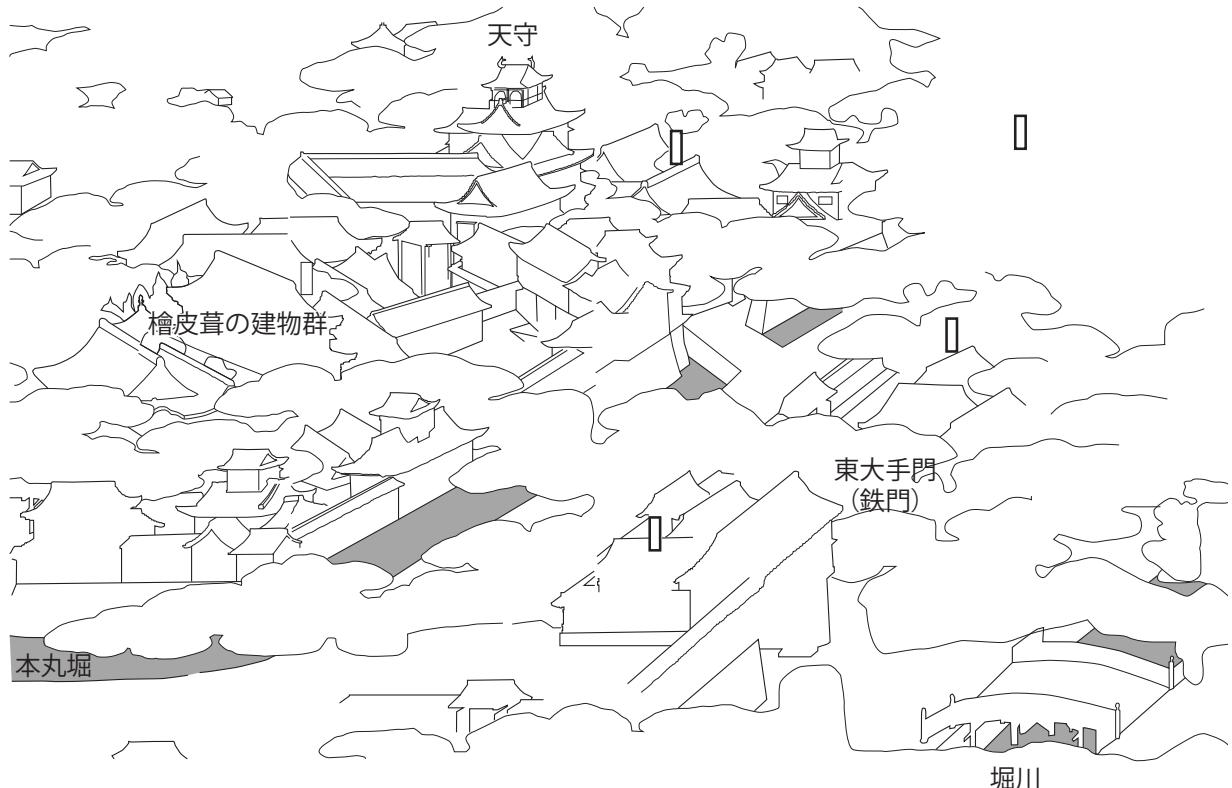


図2 三井記念美術館所蔵『聚楽第図屏風』の構図（網掛けは堀と川）

築され（『蔭涼軒日録』文禄2年8月1日条）、秀次は北之丸を常の居所としたことが知られる。

このように、聚楽第が、短い存続期間とはいえ手が加えられ姿が変わっていたらしいという想定と、発掘調査と表面波探査で、外堀が存在は確かめられながらも、聚楽第の四周を完全には廻らない蓋然性が高いという調査結果から、筆者は、2018年の論考（古川・釜井・坂本・中塚2018）では、外堀が未完成であると考え、外堀は、豊臣秀吉の後を継いで閑白となり聚楽第も継承した豊臣秀次が城主となった後に施工を開始したが、秀次が失脚して聚楽第が廃城となつたために、外堀は施工途中で工事が終了したと解釈した。この見解は、2023年発掘の西外堀が簡素な構造で、聚楽第の外堀としては規模が小さいという発掘調査成果とも、少なくとも考古学的には矛盾しないものである。

2. 文献史料と絵画資料に描写される聚楽第の姿

聚楽第が史資料の豊富な城郭である以上、考古学的なデータから少し離れて、文献史料と絵画資料に描写される聚楽第の姿を見てみる必要もある。

文献史料で聚楽第を写実的に表現するのは、まず、聚楽第完成から約半年後の天正16年（1588）4月14日に聚楽第で行われた後陽成天皇による行幸の様子を描写した『聚楽行幸記』で、行幸の公的記録として豊

臣秀吉が御伽衆の大村由己に命じて記述させたものである。聚楽第については、「聚楽と号して里第をかまへ、四方三千歩の石のついがき山のごとし、楼門のかためは鉄の扉、瑠璃星を擒んでたかく」とあり、聚楽第の外周部の範囲が3,000歩（3,000間）四方で、外郭施設は「ついがき」、すなわち築地堀とされている²⁾。そして、この記述の続きでは、聚楽第内部の様子に移るが、「儲けの御所は檜皮葺也」と行幸御殿の存在が記述されている。

ルイス・フロイス『日本史』では、さらに詳細な記述で、「周間に城壁が張りめぐらされ、すべての壁は石垣で、まるで岩石と漆喰で固められたように巧妙にできている。その濠は広く、かつ深くて水深3 ブラザ以上にも及び、しかもこれらの壁や濠にみられるものとては、ただ清潔さと新鮮さだけである」、そして「他のすべての邸宅を威圧して数階に達する壮大な一群の邸宅」、さらに「都に新たに構築した城と諸屋の同じ囲いの内部に、内裏がくつろぎに行くための幾つかの御殿を建てさせた。金属の銀の柱と鉄の門を造らせ」といった記述がある³⁾。フロイスの記述は具体的で、聚楽第の周間に石垣を伴う城壁、さらに堀がめぐらされたことが紹介されているが、内郭と外郭のいずれを指すのかは不明である。

次に挙げられるのが、豊臣秀次の近習であった駒井

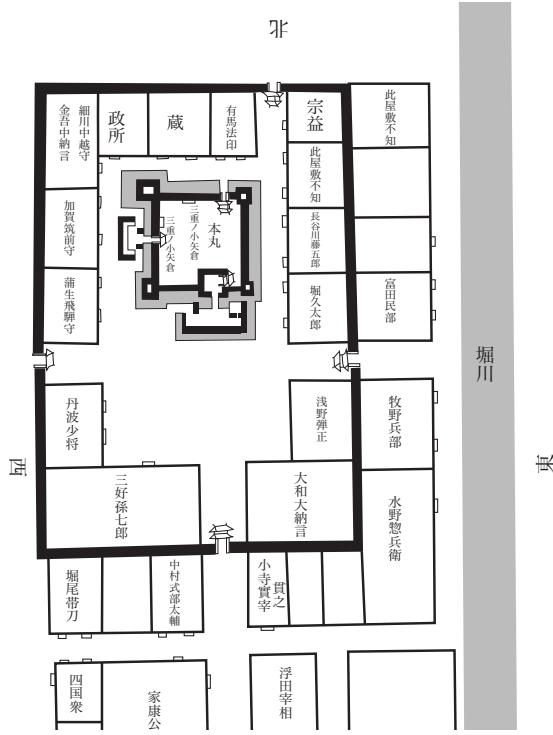


図3 浅野文庫蔵『諸国古城之図』(部分)

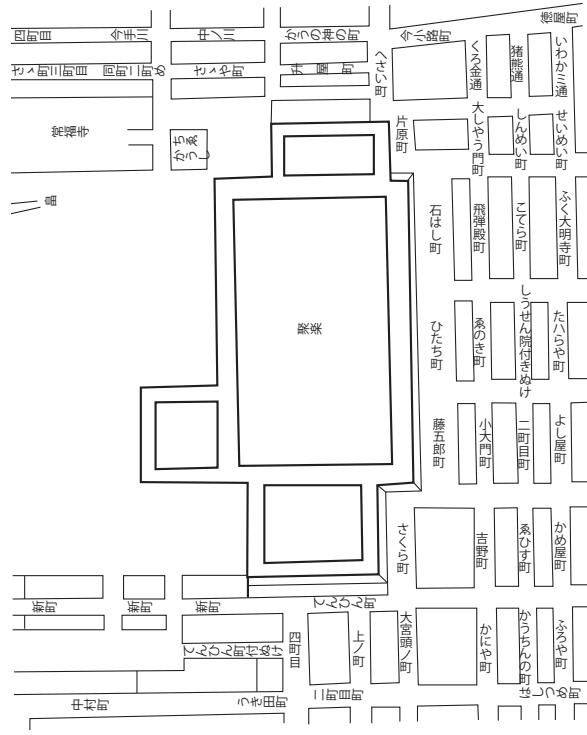


図4 洛中洛外図屏風（京都図屏風）（部分）

重勝が記した『駒井日記』で、特に聚楽第研究で必須とされてきたのが、聚楽第の最末期にあたる文禄4年4月10日条である。記述の内容は、(一)本丸の規模、(二)南二之丸と北之丸、西之丸の規模、(三)内郭を囲む柵木の範囲、という三つの部分に大きく分かれる。本丸の規模については、「聚楽本丸石垣之上壁之廻間數、一南之門より北之門迄百八拾間、一北之門より西之門迄貳百貳拾間、一西之門より南之門迄八拾六間、一合四百八拾六間 但八町壹反切」、南二之丸、北之丸、西之丸の規模については、「右之外 一南貳之丸之廻百八拾四間、一北之丸之廻百九拾貳間、一西之丸之廻百三拾間 合五百六間」、(三)については、「聚楽柵木通間數 一南二丸門より北之門迄四百五十間、一北之門より西之門迄三百五拾五間、一西之門より南之門迄貳百貳拾貳間、合千三拾壹間、但十七町壹反切五間」とされる。『駒井日記』で記述される各曲輪の規模と構造については最近論じたことがある(古川2023)ので詳細はそちらを参照されたいが、聚楽第について執拗なまでに詳細なこの記述に於いて、外郭として記録されるのは(三)に記述される柵木のみである。駒井日記の記述は中心の本丸から遠心状に他の区画へと移っていくのが特徴であるが、最外郭に位置するはずの外堀については記述が無い。この理由としては、文禄4年4月の段階で外堀まで詳細な測量が完成していないなどの理由で駒井日記には記されなかったのか、

あるいは、そもそも外堀が存在しなかったのか、どちらかとなる。

一方、絵画資料でまず挙げられるのは、聚楽第そのものを画題とする絵画である。後世の想像で描かれた作品も含めるとかなりの数に上るが、聚楽第が地上に存在した時期か、消滅後程なく描かれた、もしくは作品自体の年代は江戸時代前期に下るもの、上記のような作品の忠実な写しと考えられる、三井記念美術館所蔵の『聚楽第図屏風』(図2)、堺市博物館蔵『聚楽第行幸図屏風』、尼崎市教育委員会所蔵『洛中洛外図』に共通する構成要素として、堀に囲まれた本丸の一方の隅には天守が描かれ、そしてもう一方には檜皮葺の建物群が立ち並ぶ。後二者の作品には後陽成天皇の行幸の様が描かれていることから、この檜皮葺の建物群には『聚楽行幸記』にも記述される行幸御殿が含まれている可能性がある。本丸の周囲には石垣がめぐり、その上には城壁と櫓群が描かれている。内郭で描写されるのは本丸だけで、西之丸や南二之丸といったそれ以外の曲輪は描かれない。これらの絵画資料が実態に忠実であれば、当初は本丸しか存在していなかったことになるが、実態は不明である。そして、本丸の外側、方角では東にあたる地点には大きな門があり、その両脇には石垣と城壁が表現される。門には石垣と城壁が伴ったようだが、外郭の四周に至るまで石垣と城壁が巡っていたかは金雲に隠され不明である。ちなみに、

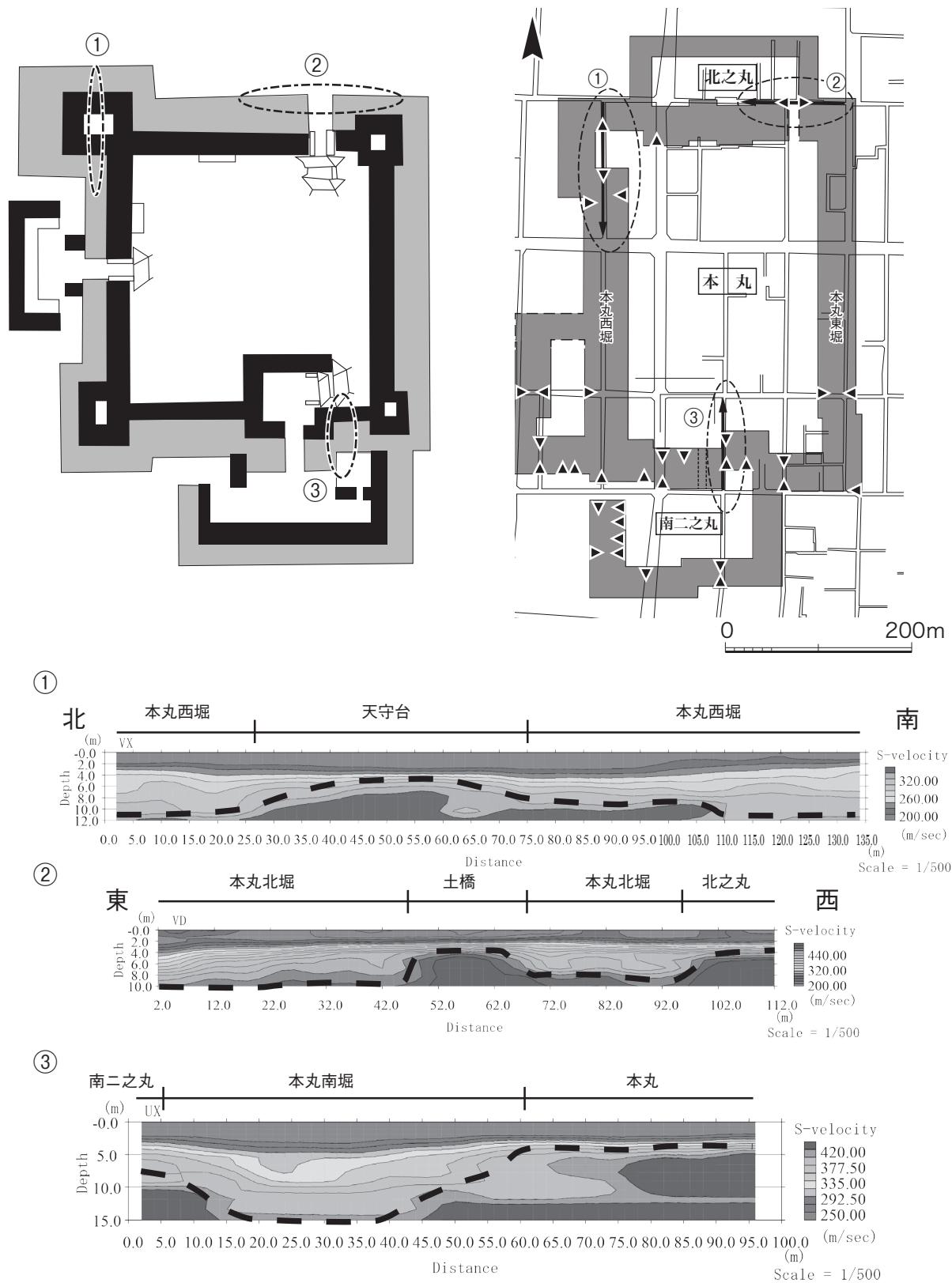


図5 『諸国古城之図』の聚楽第と考古学データから復元した聚楽第平面図

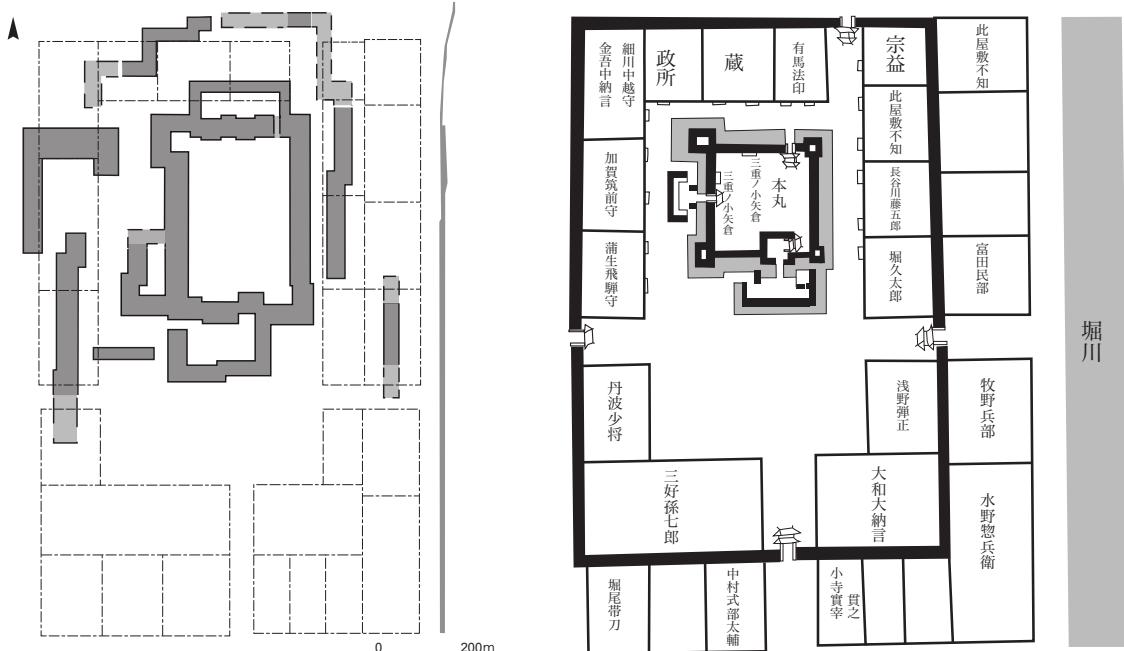


図6 考古学的データによる聚楽第復元図と浅井文庫蔵『諸国古城之図』の比較

文献史料上では聚楽第の外郭の門は「楼門」、「鉄門」と表記され、たびたび登場する（『聚楽行幸記』、『天正年中聚楽亭両度行幸日次記』ほか）。そして、この門の外側、東側には川（現存する堀川）が流れるものの、聚楽第を囲む四周の外堀は、絵画上には存在せず、そのかわりに聚楽第の周囲には大名の屋敷が描かれている。

上述の絵画には部分的な脚色や、また、多視点による描写がなされている可能性もあり、いわゆる「写実」とは異なるものを表現している。その一方で、天和3年（1683）に作成されたと伝わる浅井文庫蔵『諸国古城之図』（図3）に描かれる聚楽第図は、城郭としての縄張り図として表現されており、平面的な聚楽第の実情を示している可能性が指摘してきた。難点は聚楽第の存在した時代から約1世紀を経た資料であることだが、本丸、南二之丸の形状は、発掘調査と地表面探査から得られた両曲輪の形状とほぼ一致している（図5）ことが、その後に判明している（古川・釜井・坂本・中塚 2018）。『諸国古城之図』自体は聚楽第の破却からはるか後年のものだが、文禄年間の秀次城主期に増築された北之丸が描かれていないことから、秀吉期の聚楽第、すなわち築城当初に近い形態を描写したものと考えられる。そして、その正確性から、後世になってから新規に想像で作図したものではなく、信頼性の高い原図や記録を参照して作図された信頼性の高い資料と位置付けられる。

また、聚楽第が破却されて数十年後の、内堀が地表

の凹みとしてまだ残っている状況が描写された『洛中洛外図屏風（京都図屏風）』（図4）は、これまでにも重視されてきた資料であるが、本論の視点からは、地表面に残っていた聚楽第の最終形態の痕跡を端的に示す絵画資料として、特に重視したい資料である。『洛中洛外図屏風（京都図屏風）』には、本丸と北之丸、西之丸、南二之丸の内堀が描かれ、本丸の北、東、南の三方には都市域が広がってきていることが示されている。また、この10数年後の寛永14年（1637）に描かれた別の絵図の段階には、内郭も完全に姿を消し町場と化すことが指摘されている（杉森 1993）。

3. 諸データに見られる整合と矛盾

続いて、考古学的な情報である発掘調査、地表面探査の成果と、文献記録、絵画資料の描写を比較する。

内郭部の本丸、南二之丸についてはほぼ矛盾が無い（図5）。本丸の北西隅に天守が存在したことは、『聚楽第図屏風』及び『諸国古城之図』の描写から確実視されるが、地表面探査でも、本丸北西隅が顕著に張り出す形状であることが判明しており、規模からも、天守台の基部と考えられる（図5①）。また、『諸国古城之図』の本丸北堀には土橋が描かれるが、同一地点の地表面探査で、堀が途切れ、土橋が存在することが明らかとなっている（図5②）。そして、発掘調査と地表面探査によって復元された聚楽第本丸の全体的な形状は南北に長く、正方形に近い『諸国古城之図』とは異なるが、聚楽第廃城後の地図である『洛中洛外図屏

測線 a

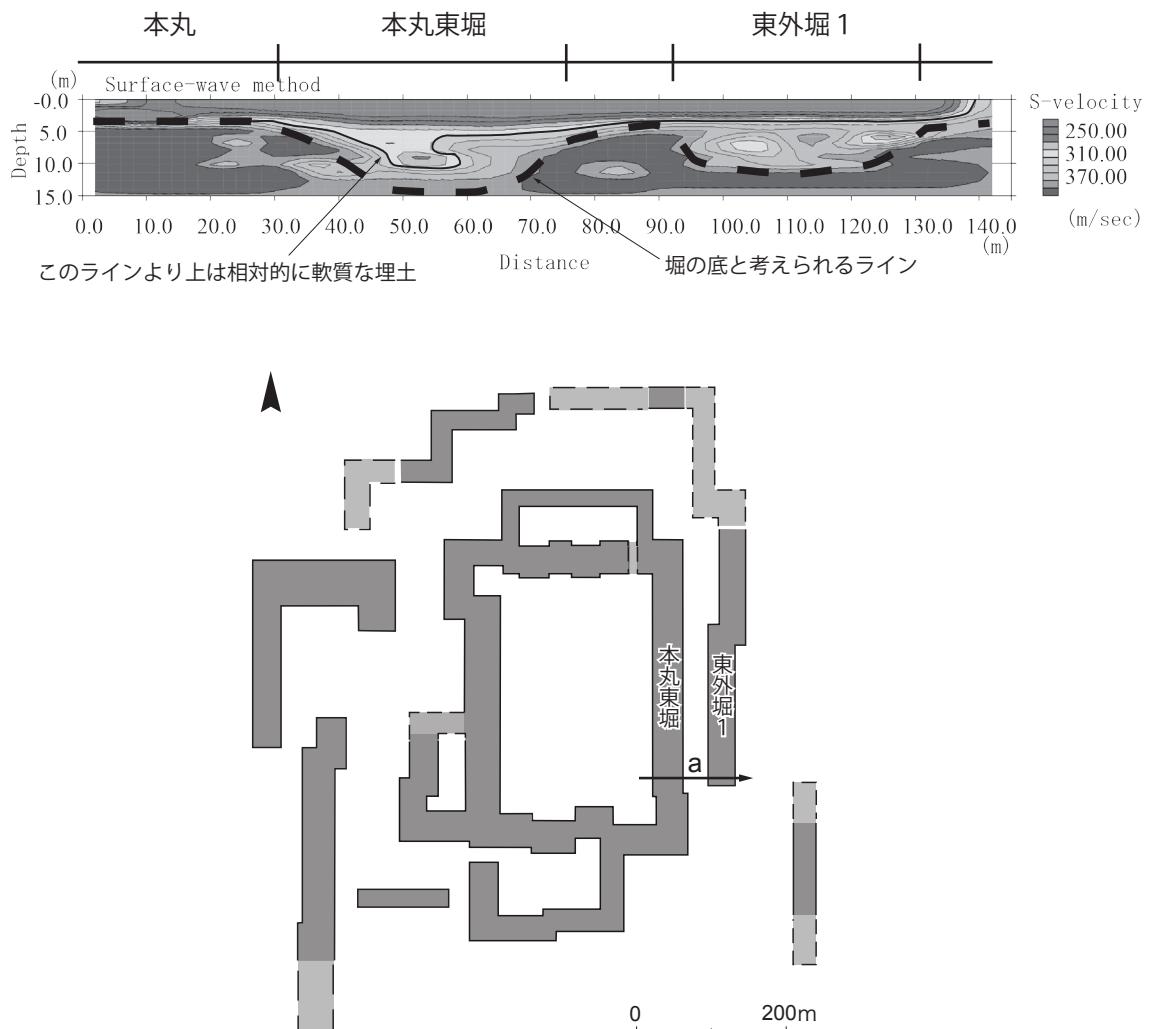


図7 本丸東堀と東外堀1の埋戻し状況

風(京都図屏風)』とは整合する。さらに、南二の丸においては発掘調査と地表面探査が高い密度で実施されているが、その結果、曲輪外郭線の折れを含む詳細な平面形状の復元が可能となった。こうした情報から復元された南二の丸の形状は、『諸国古城之図』と一致する。

一方で、大きな矛盾を示すのが、外堀の存在である。考古学的には聚楽第をめぐる外堀が存在した可能性は高い。特に情報量が蓄積されてきているのは西外堀で、発掘調査及び表面波探査の結果、南北方向に正方位で延びる堀が存在したことは確実視される。2023年の発掘調査では、堀状遺構から聚楽第所用と考えられる瓦が出土しており、遺物にも矛盾はない(京都市2023)。このほか西之丸は考古学的な復元とは形状が異なることも挙げられるが、『諸国古城之図』が描寫したよりも後の段階に手が加えられた可能性もある。

しかし、上述したとおり、史資料には、外堀の存在を示すデータが一切無い。聚楽第は短い存続期間のうち、城主が秀吉であった時期と、秀次であった時期があるが、秀吉期の聚楽第を描写する『聚楽行幸記』、秀次期のなかでも最末期の聚楽第を描写する『駒井日記』のどちらにも外堀の存在は示されていない⁴⁾。絵画資料についても同様である。三井記念美術館『聚楽第図屏風』の表現は『聚楽行幸記』の記述とよく合致しており、行幸が行われた舞台の聚楽第本丸に焦点を当たした絵画のようで、行幸の目的地である本丸や行幸行列の通過した大手門や街路以外の、二之丸や西之丸といった、画題から外れた部分は省略された可能性もあるが、本丸を廻る堀の外側には、東を南北に流れる堀川が描かれるものの、外堀は描かれていない。そして、秀吉期の聚楽第の曲輪を正確に描いていることが考古学的にも立証された『諸国古城之図』では、聚楽第内

郭の周囲には、徳川家康、宇喜多秀家といった有力武将や千宗易（利休）の屋敷が描かれるものの、堀の存在は一切表現されていない。

図6は、『諸国古城之図』に描かれる大名屋敷の配置を考古学的に導出された聚楽第の平面図に合成してみたもの⁵⁾だが、仮に秀吉期の聚楽第に、考古学的に確認されている外堀が伴ったとすると、大名屋敷地は外堀で分断されてしまう。そして、屋敷地に必要な面積は確保できない。外堀の位置は内郭からあまり離れておらず、内郭と外堀との間に屋敷に必要な敷地を確保することが難しいためである。さらに、聚楽第廃城後、地上にしばらく残っていた堀跡のくぼみを地図に表現した『洛中洛外図屏風（京都図屏風）』にも、外堀の存在は表現されていない（図4）。

このように、考古学的には外堀の存在が確実視されるにも関わらず、信頼性の高い文献史料及び絵画資料は外堀の存在については完全に沈黙しているという矛盾が生じているのである。

4. 「聚楽第外堀問題」の解釈

上述した聚楽第外堀の存在に関する矛盾を、やや大仰ではあるが、「聚楽第外堀問題」と呼称する。この問題については、当然のことながらどのデータを優先するかによって解釈が分かれる。筆者を含め、考古学的証拠を重視する研究者（森島 2001、馬瀬 2005）は、範囲については意見が分かれるものの、外堀の存在を肯定している。一方で、外堀の存在を否定する論者としては、加藤繁生が挙げられる（加藤 2020）。加藤は、上述の史資料から外堀の存在を疑問視し、仮にそうした遺構が存在したとしても、未発見の戦国城館の堀や埋没河川、あるいは土取穴である可能性も否定できないのではないかと舌鋒鋭く批判している。加藤が文献史料、絵画資料と考古学的証拠の矛盾を指摘するのはもっともであり参考となる点も多く、考古学的証拠を重視する立場の論者からの回答は必要であろう。

ここで加藤の解釈に対して筆者の意見を述べると、加藤の批判の根拠は一定認めつつも、やはり従来の見解のとおり、この遺構は聚楽第に伴う外堀と考える。まず、外堀の可能性のある凹みは聚楽第内郭を囲むような位置関係でみつかっており、聚楽第との密接な関係を示唆するものである。また、京都における平安時代から安土桃山時代の堀の幅を調査した馬瀬智光の分析（馬瀬 2015）によると、戦国時代に至っても、堀の平均的な規模は、幅 3.7m、深さ 1.3m 前後とされるが、安土桃山時代に織田信長が普請奉行を務めた旧二条城



図8 江戸時代初頭の聚楽第跡
(京都国立博物館蔵洛中洛外図屏風 (狩野 2010))

の段階で急激に大型化し、旧二条城南内堀は最大幅 26.9m である。そして、豊臣秀吉の聚楽第になるとさらに大型化し、本丸、西之丸を囲う堀は幅約 43m に達する。2023 年の聚楽第西外堀の発掘調査では幅約 12m であることが判明しており、聚楽第の堀としては幅は狭いが、その一方で、戦国時代以前の堀よりもはるかに幅が広いことも事実である。そして、出土遺物の年代からも、聚楽第の堀と考えて問題はない。

とはいって、存続期間の短さと豊臣政権の滅亡によって大きな謎に包まれたままとなっている「聚楽第」の実態を解明するには、その種類を問わず信頼性の高いデータを活用する必要である。各データが相互に矛盾したように見える状態で、外堀の有無の解釈について主張が平行線をたどっている現状は生産的ではない。したがって、筆者は、「聚楽第外堀問題」を解決するためには、遺構、文献史料、絵画資料における各データの信頼性の高さを認めながら、同時に、矛盾の無い解釈を探求することとしたい。

外堀の掘削について、筆者は 2018 年の段階では、豊臣秀吉が秀次に聚楽第を譲ったあと、聚楽第の廃城直前に秀次の意思によって外堀の掘削が着工されたが、秀次の突然の失脚によって外堀は完成することなく、江戸時代初頭の都市開発によって早くにその姿を消したために記録に残っていないと推測した（古川・釜井・坂本・中塙 2018 の筆者担当部分）。その根拠として、地表面探査を各地点で実施した結果、総じて外堀の埋土は固いという傾向があることに注目した（図7 上）。

多数の人員によって埋め戻され、叩きしめられたことが推測されたためである。一方、内堀の埋没過程は対照的である。江戸時代初頭の『京都国立博物館蔵洛中洛外図屏風』(図8)では、聚楽第跡の内堀は部分的に埋まり、この段階に至ってもなお残っていた木石は採取の対象とされ、曲輪跡は歌舞伎の興行の場となっていたことが具体的に描写される。そして、図5③の本丸南堀と図7の本丸東堀の探査結果は、本丸の堀中心部埋土上層が軟質な堆積土であることを示しているが、これは、廃城後に本丸堀の中心部付近が凹み状として残っていた様子を考古学的なデータとしても伝えるものである。そして、こうした検討の結果、『洛中洛外図屏風(京都図屏風)』(図4)のように、内堀の痕跡だけが江戸時代前期に残り、早くに姿を消した外堀の痕跡が記録に残っていないのではないかと解釈したのであった。

しかし、この案は、下記の理由から、蓋然性が高いとは言い難いものである。

第一に、聚楽第は当時の京都の中心に位置し、市中の耳目を集める城郭であった。秀次が城主となった後に新たに増築し居所とした北之丸についても、『蔭涼軒日録』のように文献記録が残っている。それより大規模で、北之丸よりも多くの人が目にすることことができたはずの外堀工事について、全く記録がないことは説明が難しい。

第二に、聚楽第の四周を廻る外堀が強固に埋められたとして、それに対し、内堀がなぜ手間のかからない埋戻しがなされたかという点が問題である。江戸時代前期の聚楽第跡周辺では、都市化による開発圧が強かったことが洛中洛外図屏風(京都図) (図4) ほかの資料から伺われ、聚楽第の外郭から内郭へと段階的に町場化したことがわかっている。聚楽第の廃城段階で外堀と内堀が存在し、そして、開発を目的として聚楽第跡地を平坦な更地とするのであれば、外堀だけでなく、内堀も同様に固く埋めるはずである。しかし、考古学的なデータと絵画資料が示す聚楽第跡の実態は、廃城後、数十年にわたって放置され芸能が開催される「無縁の場」と化していた聚楽第跡で、内堀が次第に埋まり、最終的には周囲の町場化に伴って城郭としての痕跡が次第に、あるいはより直截に述べると、なし崩し的に、地上から姿を消していったという実態が読み取れる。内堀の放置は廃城後の聚楽第跡に対する当時の人々の意識の表れと取れるが、その一方で、外堀を躊躇なく強固に埋めるだろうか。

第三に、聚楽第は当初から、関白の「邸宅」と広く

認識され、大規模な外堀の存在自体が望ましいものとはみなされていなかった可能性が高い。秀吉期の聚楽第には外堀が存在しなかったと考えられ、『聚楽行幸記』によると、背の高い築地塀で囲まれた情景が描かれ、『諸国古城之図』をはじめその他の史資料の描写とも概ね一致する。少なくとも、明らかな矛盾はない。秀次の段階になってこの認識が大きく変わるものであろうか。

上記の理由から、聚楽第の外堀が秀次が城主期で、かつ、廃城直前の最終段階の施工とみなす筆者のかつての想定は、考古学的には可能性は否定されないにしても、他の史資料の内容と総合的に評価すると、苦しいものであることは否めない。

こうした欠点は認識しつつも、これに代わる外堀の評価に思いが及ばなかったのが前稿の段階である。

しかし、前稿の執筆直後、2018年に彦根市で開催された佐和山城シンポジウムで聚楽第跡について発表した際、会場で出会ったある方に、「聚楽第外堀の掘削は最終段階とは限らないのではないか」というご感想をいただいた。その時の私にとっては想定外の発想であったが、「聚楽第外堀問題」に関する極めて示唆的な意見であった。このご意見は本稿執筆の直接的な動機となっているもので、本来であればご芳名を記した上で御礼を申し上げるべきなのだが、愚昧な私は、迂闊にもお名前をお伺いしそびれたまま現在に至っている。お詫びを申し上げると共に貴重なご教示に紙上ながら心から感謝申し上げる。

5. 「聚楽第外堀問題」に関する現在の解釈

上記のとおり、「聚楽第外堀問題」はシンプルな手法ではなかなか解決できそうにない。このような問題意識から、現在の筆者は、聚楽第外堀は、これまで考えてきた最終段階の施工ではなく、むしろ、反対に、秀吉による聚楽第築城の最初期に掘削されたものと解釈する。そして、この外堀は途中まで掘削されたが、工事途中の段階で聚楽第の設計構想が、武家政権としての「城郭」から関白の「邸宅」へと大きく変更されたため、施工が中断し、外堀は未完成の状態で、普請のために動員された大多数の人員の手で入念に固く埋め戻されて姿を消し、埋められた外堀跡は当初の構想とは異なる大名屋敷へと変更されたという経緯を想定する。

やや複雑な経過をたどることになるが、考古学的データと史資料の記述及び描写を整合することが可能な新たな解釈となるのではないだろうか。

この解釈と合致しうる文献史料も存在する。聚楽第の普請の情報を最初期の段階で入手していた吉田兼見は、『兼見卿記』天正14年2月24日条に、「内野普請在之、堀也、口廿間、下へ三間々中、四方千間也」と記述している。注目すべきは、堀の掘られている範囲が四方1,000間とされていることで、m法に換算すると約2kmであるが、この範囲は『駒井日記』に記述される本丸の外周486間よりはるかに長い。「四方1,000間」を「四周1,000間」に読み換えると、倍以上となる。

そして、南二之丸、西之丸といった他の曲輪を足しても、この規模には達しない⁵⁾。大規模であることを示す比喩的な表現として「千間」と記している可能性もあるが、その前に「堀口」(おそらく堀幅)を「廿間」(約40m)、堀の深さを「三間」(約6m)という具体的な数値で記述している。発掘調査と地表面探査で得られている聚楽第内郭と外郭の堀幅は約30~40mであり、さらに、ルイス・フロイス『日本史』は聚楽第の堀の深さを「3 ブラザ以上」(約5.5m以上)と記述しており、『兼見卿記』と近似してくる。したがって、『兼見卿記』の「四方千間」は、いくぶんかの誇張はあるかもしれないが、単に比喩的な数値ではなく、この記述は一定信頼できそうである。

すなわち、天平14年2月の聚楽第着工直後の堀の範囲は四方1,000間または四周1,000間に近似していた、もしくは吉田兼見に「四方千間」という情報を提供するような実態であった可能性がある。この規模は内郭の範囲よりは明らかに大きいが、『聚楽行幸記』に「四方三千歩」と称される外周の築地堀よりは小さい。したがって、この段階に存在した、内郭より一回り大きく設計され途中まで施工されたが、最終的には日の目を見ることのなかった外堀を描写した可能性は十分にあると筆者は考える。

おわりに

本論は、現段階で入手可能な考古学的データと史資料との間でできる限りの整合を図ったものであるが、さらなる検証は、やはり、考古学的な手法が望ましい。聚楽第外堀と大名屋敷との前後関係を遺構調査から導出できるような成果を今後期待する。

謝辞

矢野健一先生が立命館大学に就任された2002年、私は他大学から大学院に入学した。矢野先生には、新しい環境に同時に飛び込んだ者同士として甚だ勝手ながら当初から親近感を抱いていた。矢野先生も、古墳

時代の研究をしつつ他の時代にも関心を抱く私に対しでは寛いだ対応を取られることが多く、縄文ゼミの活動内容を教えてくださったり、自由時間に英書講読の手ほどきを受けたこともあった。特に英書講読の際に、日本考古学の手法で世界を相手にする気概を示していただいたのは、難解な理論考古学を背伸びして原書で読もうとして挫折しかかっていた私にとっては大きな刺激となった。

就職した後も、2008年にアイルランドで開催された第6回世界考古学会議ダブリン大会で偶然再会するなど、なにかとご縁のある矢野先生であったが、2015年に博士課程後期に入学した際にはこれまでとは立場が変わり、研究指導教員になっていただいた。社会人として本務の傍ら博士論文を執筆する筆者に様々な面でご配慮をいただきながらも、提出までのスケジュール管理等については厳格な姿勢を貫かれた。とはいっても、私の研究発表の後には、毎回和やかな酒席を設けるという配慮もいただいた。2016年の第8回世界考古学会議京都大会の運営にも矢野先生と共に参加しつつ、なんとか予定通り博士論文を提出できたのは、硬軟を併せ持った先生のご指導のおかげである。

矢野先生に献呈する本論文は私の博士論文の対象とは全く異なっており、矢野先生の本来のご専門とも関連しない時代、テーマではあるが、矢野先生とのご縁はそもそも筆者の学問的な雑食性に起因するものであったのだから、苦笑しつつも受け取っていただけるのではないかと拝察する。

矢野先生、これまでのご指導、ありがとうございました。退職後もますますのご活躍を祈念いたします。

注

- 1) 実質的には城郭でありながら、公家には屋敷として扱われるという位置付けは、聚楽第の事実上の後継として秀吉の晩年に築城された京都新城も基本的には同様である。
- 2) 『聚楽第行幸記』の「四方三千歩の石のついがき」は聚楽第外郭の規模を具体的に示す記述であるが、非常に大きな数値である。現在の町名として残る当時の大名屋敷までを含む範囲となるため、「四方三千歩」が粉飾や文学的表現で無いとすれば、聚楽第外郭だけでなく、大名屋敷までを含めて聚楽第の範囲とみなしていた可能性が高い。
- 3) フロイス『日本史』の記述は松田・川崎訳1977による。
- 4) 図6左の大名屋敷の位置と範囲は浅井文庫諸国古

城之図の大名屋敷の配置と大きさの比率を参照して作成したもので、聚楽第周辺に点在する、当時の大名屋敷の跡地であることを示す名を冠した各町の位置とは必ずしも一致しない。

- 5) 『駒井日記』に記述される本丸、西之丸、南二之丸の外周の合計は 800 間となり、『兼見卿記』の「四方千間」に近いが、駒井日記の記述は各曲輪の外周距離を個別に示しそれを合算したもので、全体の外周を表現した『兼見卿記』の記述とは別の算出方法と考えるべきであろう。

(引用文献)

- 馬瀬智光 1998 「平安宮跡・聚楽第跡 No.27、No.60」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成 9 年度 京都市文化市民局 pp.5-13
- 馬瀬智光 2005 「聚楽第跡の復元 - 考古学的考察 - 」『古代文化』第 27 卷第 2 号 古代学協会 pp.15-29
- 馬瀬智光 2015 「室町から戦国時代京都の様相 - 洛中の堀を中心にして - 」『京都府中世城館跡調査報告書』第 4 冊 - 山城編 2 - 京都府教育委員会 pp.375-385
- 加藤繁生 2020 「聚楽第余聞 (2) 聚楽第外郭と千利休聚楽屋敷」『史迹と美術』906 号 史迹美術同攷会 pp.175-184
- 狩野博幸 2010 『秀吉の御所参内・聚楽第行幸図屏風』青幻舎
- 京都市文化財保護課 2023 『聚楽第跡・平安宮跡の発

掘調査』記者発表資料 (<https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000172102.html> でダウンロード可能 (2024 年 3 月 10 日現在))

杉森哲也 1993 「聚楽第址」『図集日本都市史』東京大学出版会 pp.137-138

古川 匠ほか 2013 「平安宮跡・聚楽第跡」『京都府遺跡調査報告集』第 153 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.1-86

古川 匠・釜井俊孝・中塚 良 2014 「聚楽第跡の発掘調査と表面波探査」『日本考古学協会第 80 回総会研究発表要旨』 日本考古学協会 pp.68-69

古川 匠・釜井俊孝・坂本 俊・中塚 良 2018 「中近世城郭研究における表面波探査法の活用 - 京都府聚楽第跡を対象に - 」『日本考古学』第 45 号 日本考古学協会 pp.69-79

古川 匠 2023 「聚楽第跡の探査による『駒井日記』の検証」『考古学と文化史 同志社大学考古学研究室開設 70 周年記念論集』同志社大学考古学シリーズ X III 同志社大学考古学研究室編 pp.445-454

森島康雄 1993 「平安京跡 (聚楽第跡) 発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 54 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.119-152

森島康雄 2001 「聚楽第と城下町」『豊臣秀吉と京都 - 聚楽第・御土居と伏見城 - 』日本史研究会 図書出版文理閣 pp.120-134

